平成 30 年度
地域経済産業活性化対策費補助金
（被災 12 市町村における地域のつながり支援事業）

取組事例集

はじめに

本事業は、福島相双復興官民合同チームの個別訪問活動を経て集められた被災地域の声や要望を基に、経済産業省で平成28年度に設けられた事業です。東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い避難指示等の対象となった福島県田村市、南相馬市、川俣町、広野町、楢葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村及び飯舘村における被災者の人々とのつながり創出を通じ、地域の活性化、さらには産業復興や、まちづくりにも資するような取組を支援することを目的とし、平成30年度「地域経済産業活性化対策費補助金（被災12市町村における地域のつながり支援事業）」を実施しています。

今回、取組の事例集をまとめるにあたり、これらの取組が広く伝わって地域の再生に繋がる一助となり、さらにこれらの取組を参考に今後の被災地域のつながり創出やコミュニティ再生に取組まれる皆様の活動の一翼を担えることができれば幸いに存じます。

最後に、本事例集の作成にあたり、取材や資料の提供等にご協力をいただいた各取組団体の皆様はじめ関係者の皆様方に、心から感謝申し上げます。

2019年 2月

株式会社ジェイアール東日本企画

平成３０年度 地域経済産業活性化対策費補助金

（被災１２市町村における地域のつながり支援事業）事務局

目　次

被災 12 市町村における地域のつながり支援事業 事例紹介

01　エコクラフト・手のひら会（双葉町）　2
02　舞踊とスポーツ民踊を楽しむ会（大熊町）　3
03　双葉地方町村会（富岡町）　4
04　麓山神社伝統芸能保存会（富岡町）　5
05　一般社団法人　福島地域サポートセンター（楢葉町）　6
06　被災地コミュニティ活性化委員会（広野町）　7
07　までい館 子ども向けイベント実行委員会（飯舘村）　8
08　小高マンホールアートプロジェクト実行委員会（南相馬市）　9
09　飯館村第 12 行政区（飯舘村）　10
10　川俣町の新産業創造を考える会（川俣町）　11
11　「やまおとこ」の会（田村市）　12
12　一般社団法人葛尾むらづくり公社（葛尾村）　13
13　大堀地区きずなの会（浪江町）　14

※掲載している取組については、費用の一部を自己負担している場合があります。

取組団体

エコクラフト・手のひら会

代表者 舛倉 敏江さん

取組名称

エコクラフト教室　紙バンドを使用してバック、バスケット等を作成する取り組み

取組の概要

双葉町から埼玉県加須市に避難されている方が減少し、生活に「張り」や「生きがい」を見出せずにいる年配の方もいます。避難されている方の生きがいづくりを目的に「エコクラフト教室」を開催しました。お国言葉が飛び交う和やかな雰囲気の中、優しい講師に指導を受け、参加者が自由な発想で素敵なバックやバスケットを制作しました。

■取組の様子

「エコクラフト」とは、紙製のテープを使ってさまざまな雑貨を作る手芸のことです。この教室では手芸用紙バンドとして作られた材料を利用して、バッグやバスケットなどの雑貨を制作しています。教室は月3回、福祉協議会加須事務所のホールで開催されています。作業中も制作中のバックなどを互いに見せ合ったり、日々のできごとを報告し合ったりと、楽しい会話が絶えず、いつも和気あいあいとした雰囲気です。ご指導いただいている講師も双葉町出身。一緒に避難生活をされた方なので、参加者とのコミュニケーションもしっかり取れています。講師は参加者の個性を生かしながら、発想を引き出してくれる頼もしい指導者です。

今年度は計25回開催しました。いずれは作品展を行うことを目標としています。長引く避難生活の中、福島県への帰還や、他県へ転居される方も増えていますが、教室を通して加須市で暮らす皆さんとの交流を深め、地域コミュニティの形成、それぞれの生きがいづくりとなる活動を続けていきたいと考えています。

■実施者の声

「避難による環境の変化から元気を失くし、外出を控えていた方々が教室を心待ちにし、笑顔で通ってくださるようになりました。気持ちが前向きになり、教室以外の会合にも積極的に参加するようになったことは取組の成果だと思います。自分の力で作品を作りあげることが自信にもつながり、「生きがい」となります。今後も、避難された方々の心のより所となるような運営をしていきたいと思います」

■参加者の声

「作品が完成した時の喜びは他に変え難いものです。作成した作品が実際に使えることも嬉しくやりがいを感じています。また、同じ会場で教室以外の催しもあり、教室以外の方とも交流が生まれ、新たなコミュニティを構築することができました」

取組団体　舞踊とスポーツ民踊を楽しむ会

代表者 橘 弘美さん

取組名称　「舞踊とスポーツ民踊を楽しむ会」第 2 回ふれあい交流会 IN 会津

取組の概要

震災前から大熊町で、日本舞踊を教え、老人ホームへの訪問・披露を行っていましたが、震災後は避難生活中の高齢者が手軽に体を動かし、ストレスを解消できるスポーツ民踊をはじめました。この取組では、日本各地の民謡をスポーツ民踊に取り入れ、一緒に口ずさみ、体を動かして楽しめる全員参加型の交流会を開催し、会津若松市に避難している大熊町の方と会津若松市の方が触れあう機会を設けました。

■取組の様子

今回は、会津若松市で活動する団体と協賛し、会津若松市の生涯学習センター多目的ホール(会津稽古堂)にて「第2回ふれあい交流会IN会津」を開催しました。参加者は、出演者・スタッフ約100名と来場者約120名。大熊町、会津若松市のそれぞれの方が、避難をしている人、受け入れている人という垣根を越えて交流を持つことができました。大熊町の町民にとっては、7年間もお世話になっている会津若松市の方々に感謝の気持ちを伝える機会ともなりました。参加団体は、「歌川会」「スポーツ民踊あいづ白虎」「しらかば会」「新鶴ひょっとこ踊り保存会」と私たち「舞踊とスポーツ民踊を楽しむ会」です。出演者は60～70代を中心とした男女で、中には今回が初舞台となる80代の方もいらっしゃいました。当日までに、週に一度の稽古を何か月も前から重ね、1団体で3～4曲ほど踊ります。この稽古期間に参加者同士で協力し合い、絆を重ねることができました。

心待ちにしていた当日は大盛況で、地域の方にもご観覧いただき、全員で交流会を楽しみました。今後も大熊町、会津若松市の親睦を深めるべく、さまざまな活動に積極的に参加していきたいと思っています。

■実施者の声

「練習場所の確保、衣装や当日の準備など大変なこともいくつかありましたが、出演者の方に『またやろう』と声をかけていただいたことや、観覧者からの『次はいつやるの』という声をいただいたことで、本当にやってよかったと思います。また日頃から優しくしていただいている会津若松市の皆様へも感謝を伝えることができたと思います」

■参加者の声

「当日まで、みんなで力を合わせて練習することで絆が深まりました。これからも地域の皆さんと一緒にがんばっていきたいと思っています」

取組団体

双葉地方町村会

代表者 松本 幸英さん

取組名称

双葉地方復興祈念還暦野球大会

取組の概要

福島県還暦軟式野球連盟に加入している12チームによるトーナメント戦を、3日間にわたって開催。野球大会を通じて復興に向けて前向きに取組む双葉地方の現状が県内外に発信されました。さらに参加者同士の交流が深まることで新たなコミュニティが形成され、参加者の生きがいの創出、健康づくりにつながる取組となりました。

■取組の様子

SOSO.Rならはスタジアム・楢葉町営サブグラウンドにおいて、福島県還暦軟式野球連盟加入のうち12チーム（約350名）によるトーナメント戦を、3日間にわたって行いました。大会初日の開会式では、楢葉町の松本町長や福島県還暦軟式野球連盟の橘会長による挨拶、来賓祝辞、紹介ののち、昨年の第1回大会優勝チームである川俣シルクスターズの主将による選手宣誓がありました。本年度の優勝に向けてどのチームも試合前から気合十分の開会式となりました。

あいにく、大会期間中には小雨が降るなどし、やや肌寒い中での試合となりましたが、選手は雨も吹き飛ばす勢いで白球を追いかけました。一投一打に集中したプレーが繰り広げられ、観客も巻き込んだ大きな盛り上がりを見せました。

参加者たちは大会に向けて練習を重ねることで、健康面の向上を図ることができています。また大会を継続することで、生きがいづくりにつなげられていることは大きな成果です。復興に向けて日々頑張っている被災地の明るく元気な取組として、県内外に周知できたのではないかと思います。

■実施者の声

「昨年より4チーム増え、参加者も100名増えました。県内の還暦を過ぎた野球好きの勇姿を多くの方にご覧いただき、ますます大会に興味をもっていただけたのではないかと思います。終了後には、多くの参加者から、『来年はいつ開催するのですか』『来年こそは優勝します!』と次回開催を期待する声をいただくことができました。大会の様子は各報道機関に取り上げられ、球場に足を運ぶことができなかった方にも取組について広報できたと思います」

■参加者の声

「球場周辺にいろいろな建物が整備されていて、浜通りの復興が進んでいるなと、実感することができました」

「多くの方に還暦野球に興味を持っていただき、この試合を楽しみに双葉地方に足を運んで欲しいと思います」

取組団体

麓山神社伝統芸能保存会

代表者 佐藤 智之さん

取組名称

上手岡麓山神社の火祭り

取組の概要

平成29年4月の一部地域を除いた避難指示解除を受けて、地域住民、復興事業などに携わって新しく居住しはじめた住民、学校が再開した子どもたちのため、近隣住民のコミュニティを再構築するべく、地域の伝統的な祭礼を8年ぶりに再開しました。「七十五膳の献膳」「火祭り神事」「盆踊り」を開催し、多くの交流を生むことができました。

■取組の様子

福島県指定重要無形民俗文化財であり、伝承400年の「麓山（はやま）の火祭り」は、毎年8月15日の朝、五穀豊穣と無病息災を願い、七十五膳の献膳を祭壇に捧げ、夕方からは、たいまつを担いだ男性たちが「センドー、センドー」の掛け声とともに麓山を駆け上がる祭礼です。

富岡町の避難指示が解除されたことで、祭礼の復活を望む声が多くあがってはいましたが、麓山神社伝統芸能保存会のメンバーは他市にそれぞれ避難していました。しかし今回、再び集まった保存会メンバーが中心となり、古くから祭礼が行われていた富岡町内の麓山神社で8年ぶりに再開することができました。担ぎ手がどれくらい集まるのか不安はありましたが、杞憂に終わり、当日は大人から子どもまで約50名の男性たちが復興を願い、長さ約3メートル、重さ40キロにも及ぶたいまつを担いで参道をあがりました。地域住民の復興にかける意気込みが祭礼を通して感じられ、祭礼に集まった観光客の方々にも復興に向かう力強い足音を感じていただけたと思います。震災によって失われてしまったコミュニティでしたが、伝統行事を再開することで、再び地域のつながりや絆が生まれコミュニティを再構築することができました。

■実施者の声

「地域の文化財が、地域コミュニティにとって重要であることを確認することができました。祭礼の再開が住民にとって、アイデンティティを再確認する場となったばかりでなく、観光で集まった人々にも復興の状況を周知する場になったと思います」

■参加者の声

「震災後、富岡町内に住民が住むことができるようになり地域の文化や祭礼も再開されつつある状況に復興へ繋がる希望が湧きました」

「子供たちに地域のお祭りを見せることができて感慨無量です」

「富岡町を代表する夏の神事を通して復興する地域への関心が一層強くなりました」

取組団体

一般社団法人　福島地域サポートセンター

代表者 渡辺 岳志さん

取組名称

被災地での手芸品制作による地域のつながりとコミュニティの維持

取組の概要

被災地で、孤独な毎日を過ごす方々が今もなお見受けられます。こうした方のコミュニケーションの場として手芸品制作を行っています。地域住民が集まり、一つの目標に向かって助け合うことは「人と人とのつながり」や「助け合いの大切さ」「喜び」を感じる機会です。新たなコミュニティの場であり、健康増進や生きがいづくりの場ともなっています。

■取組の様子

楢葉町にある「まなび館」の一角で、町内の方や双葉郡の方が毎週集まって、布わらじ制作を行っています。帰還者を中心とした参加者が集まり、わいわいとおしゃべりをしながら、カラフルな古布を切ったり、ミシンをかけたりとひとつひとつ整えながら、昔ながらの方法で編んでいます。布わらじの色合いをみんなで考えたり、力のいる工程は支えあったりと、参加者同士が助け合いながら、日々明るく楽しく制作しています。

楢葉町は避難指示で町を離れた方が多くいましたが、帰還が促進され、高齢者を中心に町に人が戻りつつあります。しかし町内には帰還された方々のコミュニティが不足しています。布わらじづくりもこうした現状におけるコミュニティ回復の一環としてはじめたものです。布わらじは材料となる古布を集めるのが大変で、近隣市町村の業者を訪ねて材料調達をしていますが、参加者は調達ができるのも健康があればこそという意識でいます。今後は、教室の実施や展示会の開催という目標も生まれ、参加者のやりがいとなっています。地域の住民同士が力を合わせることは、ふるさとならではの生活であり、生きがいを生みだしました。

■実施者の声

「町に帰還されていない方も参加するなど、布わらじ制作を目的に、震災前のように地域のみんなで集まっています。参加者からは『以前のように、地域の方とつながっていられることがとても嬉しい』という声が聞こえています。今後は、若い世代にも参加を呼び掛け、幅広い年齢層で活動し、展示の機会も増やすなど、被災地の方々とのつながりを大切にしていきたいと考えています」

■参加者の声

「唯一の楽しみなので、地域のつながりとして今後も継続して欲しいと思います。みんなで一つの目標を持って行う素晴らしさや、助け合う気持ちを感じることができています」

取組団体

被災地コミュニティ活性化委員会

代表者 中野 崇子さん

取組名称

双葉郡のコミュニティを活性化させるプロジェクト

取組の概要

地域コミュニティの活性化を目指し、福島県双葉郡内の町村民を対象とした健康体操教室・ヨガ教室、地域文化の勉強会、お茶会を開催しました。取組を通して、参加者の運動不足の解消、孤立予防、健康づくり、親睦と交流の促進を図ることができ、結果的にコミュニティの活性化につなげることができました。

■取組の様子

広野町下浅見川地区にある災害公営住宅には津波で家を失った方が約50組が生活しています。高齢者比率が高く、集会施設などもないため、地域交流の機会がありませんでした。この公営住宅とその周辺で生活する町民を対象にボールやゴムチューブを使った健康体操教室、ヨガ教室、地域文化の勉強会、お茶会を月1回程度開催。中高齢の女性中心に毎回約10名の方が参加しました。また、運動のあとには、地域文化の勉強会として、双葉郡内の年中行事や伝統芸能の写真、音声、映像などをみんなで鑑賞しました。地域の伝統行事を再発見することによって、地域への愛着が生まれていますし、参加者のコミュニケーションも活発になっています。

体を動かすことによる心身の健康づくりと、高齢者を中心とした地域住民の孤立予防を図ることで、活気が生まれています。参加者同士は絆を深めながらいつも和気あいあいとした様子で活動を楽しんでいます。

■実施者の声

「開催を楽しみにして下さっている方が多くいらっしゃり、地域住民間でのコミュニケーションが増えている実感があります。また、回を重ねるごとに参加者の方の表情も明るくなり、体調がよくなったなどの声をいただくことが多くあります。健康増進、孤立予防を実現し、地域のつながりも再構築できる取組になったと思います」

■参加者の声

「定期的に運動することで肩の痛みがとれるなど体調の変化を感じています。運動の後の文化的映像鑑賞会では、地域の価値を再発見することができました。みんなで集まることで絆が深まっています」

取組団体

までい館　子ども向けイベント実行委員会

代表者 林 直史さん

取組名称

飯舘村周辺の子どもたちの、交流や楽しみを創出する取組

取組の概要

震災から7年が経ち、飯舘村では新たな学校が開校するなど、徐々に子どもたちの暮らしが再開されつつあります。しかし、震災前のコミュニティは失われたままであり、子どもたちが楽しめる機会も、それほど多くはありません。そこで、飯舘村周辺の子どもたちに、夏休みの楽しい交流、体験、学びの場を創出することを目的に、イベントを企画・開催しました。

■取組の様子

取組は地域交流の拠点としてより一層の活性化を図ることも狙い、「いいたて村の道の駅までい館」で開催しました。屋外イベントスペースには、全長15メートルの巨大ダンボール迷路と、ダンボールクラフトの体験スペースを設営。子どもたちと家族ら約100名が訪れ、迷路や工作を楽しみました。ダンボール迷路は、開催当日の早朝から、構成員総出で設営。初めて目にする巨大ダンボール迷路を、子どもたちは夢中になって駆け回り、その様子は会場に賑わいをもたらしていました。

子どもたちがクラフトで工作する作品は、貯金箱や小物入れなど、実用的なものを選びました。作った作品を自宅に持ち帰り、夏休みの思い出として、手元に残してほしいという想いからです。工作の難易度を少し高くしたことにより、保護者も一緒に参加している方が多く、親子のコミュニケーション創出にもつながりました。会場内の案内看板や、工作用のテーブルもすべてダンボールで特別に制作したことで、イベント全体に一体感が生まれ、多くの親子連れが、看板の前で記念写真を撮る姿を見ることができました。イベントを実施することで、子どもたちが「体験」を通して、学び、考え、交流する機会を生むことができたと思います。

■実施者の声

「『体験』や『思い出』の創出にこだわりました。子どもたちが目を輝かせて夢中になる姿が、何よりの成果だったと考えます。迷路を走りまわったこと、工夫を凝らしてオリジナル作品を作ったことが、飯舘村で過ごした2018年夏休みの思い出として、子どもたちの心に長く残ってくれたらと思っています」

■参加者の声

「ダンボール迷路は初めて見ました。普段はできない体験なので、子どもたちが楽しそうで良かったです」

「工作が楽しくて、親の方が夢中になりました。夏休みの宿題にできそうな仕上がりです。大切に使わせていただきます」

取組団体

小高マンホールアートプロジェクト実行委員会

代表者 上石 美咲さん／半谷 栄寿さん

取組名称

大蛇伝説マンホールアートをテーマとしたイベントの共創による小高での多世代交流の創出 小高大蛇マンホールアートイベントを開催

取組の概要

多くの方に南相馬市小高の魅力に気づいてもらうために、マンホールアートに着目した企画を立ち上げました。「地元の方にとっては当たり前すぎてなかなか気づかないマンホール」に「アート」を掛け合わせ新たな価値を創出するイベントを開催しました。地元の小学生、高校生、保護者の交流促進を図るとともに、地域資源の再発見と地元の理解促進、域外への小高の魅力発信ができたと思います。

■取組の様子

小高小学校での出前授業では、小学校周辺にある大蛇マンホールを確認し、小高区に伝わる大蛇伝説と、それをモチーフにしたマンホールについて解説しました。また、ぬり絵の下絵を配布し、ぬり絵コンテストへの参加を呼びかけました。その後、南相馬市小高区ふれあい広場でマンホールアートイベントを開催。「大蛇伝説マンホール　ぬり絵コンテスト」や「ゼロ・ゴミッション＆街歩き」としてゴミ拾いに加え、地元商店街にご協力いただいてスタンプラリーやクイズなどを行い、小学生、高校生、保護者の交流を図りました。さらに、南相馬市の下水道課の協力で、本物の大蛇伝説マンホールを使った、マンホールアートTシャツづくりの体験会も実施。イベントに参加した小学生の中から4名を抽選で選び、実際に道路のマンホールへの色つけ体験も行いました。小高区秋祭りではブースを設置し、訪れた方を対象に、マンホールアートTシャツづくりの体験サービスを実施。2日間の実施期間中に約200名の方に体験していただきました。期間中は、小高区浮舟会館のロビーの展示エリアを借りて、夏のイベント時に募集した小学生の大蛇マンホールぬり絵を展示し、多くの来場者に見ていただくこともできました。

■実施者の声

「首都圏在住の実施者と地域の学生や事務局との連絡が課題でしたが、お互いの活動を尊重し協力し合うことで、実現できました。多世代交流の機会創出、地元の理解促進、観光資源の創出などの成果を出せたと思います」

■参加者の声

「当日のグループは小学生親子二組と高校生3人。普段は交流のない高校生との会話に、最初は戸惑いましたが、すぐに打ち解けました。高校生のさりげないサポートが頼もしかったです。いつもと違うコミュニティで集まって、その記憶がマンホールにずっと残っている、というのがとても素敵なイベントでした」

取組団体

飯舘村第 12 行政区

代表者 長正 増夫さん

取組名称

大久保・外内結の郷づくり事業

取組の概要

飯舘村は6年間に及ぶ全村避難により、コミュニティを失い、加えて放射線に対する不安もあり、一人ひとりの心身が疲弊しています。こうした状況を改善するには、避難前の「結の精神（支え合い助け合う）」を再生させることが必要です。そこで地域住民が共同して作業・学ぶ機会として、実証栽培した小麦、雑穀、蕎麦を使用し、うどん・蕎麦打ち講座、食生活講座と不安解消を図る放射線講座を企画・実施しました。

■取組の様子

実証栽培講座とうどん打ち講座には、45名が参加しました。地域と福島大の協働で実施した「小麦実証栽培」について、福島大の担当教授から実証栽培の成果報告や今後の取組についての講話を聴き、取組の必要性を共有しました。その後、講師によるうどん打ち講座を実施。参加者は自分たちの地域でつくった小麦のうどんの美味しさに感激し、今後の栽培意欲が高まってきたようでした。

食生活講座には50名が参加。避難生活で心身の不調を訴える人の改善に向けて、食生活専門家を招いて講座を実施したあと、専門家の指導のもと昼食メニューを調理し、参加者が一堂に会しておいしくいただきました。昼食には、免疫力を高める食生活についての講話もありました。

30名が参加したそば打ち講座では、蕎麦打ち専門家を招き、地域で実証栽培した蕎麦を使用した講座を実施しました。初めて体験された方もいて、蕎麦のできはまちまちでしたが、自分たちで作った蕎麦に満足していました。

最も心配な放射線についても、専門家による「放射線講座」を実施し50名が参加しました。約90分にわたる科学的データーに基づいた丁寧な講話に、放射線に対する理解が深まったと感じられました。

■実施者の声

「参加者からは感謝の意を感じられる言動が多く、目的であるコミュニティ再生とひとり一人の生活再建に、少なからず貢献していることを感じています。現在の帰還者は高齢者が多いので、高齢者の生きがいづくりとして、経験や知恵が生かせる、雑穀類の栽培と加工販売をはじめ、地域の新たな農業六次化産業にむけた取組を進めていきたいと思います」

■参加者の声

「うどん打ちやそば打ちは楽しく、講話は免疫力向上や放射線講座など不安を解消してくれるものでした。なにより地域のみんなで集まる機会があったことが嬉しく、ありがたかったです」

取組団体

川俣町の新産業創造を考える会

代表者 紺野 栄二さん

取組名称

川俣町の新産業創出に向けた自治体・企業・高校の連携した取組み

取組の概要

避難や少子化の影響等により、川俣高等学校の入学者は年々減少。地域経済の基盤となる産業を担う人材の確保が困難となりつつあります。そこで、空の産業革命として期待されるドローンに着目したスクールを開催。自治体と企業が参画することで人材育成における関係機関の連携、高校生と社会人の交流機会創出、新産業に対する地域理解促進を図ることができました。

■取組の様子

ドローン講座で実績を有する学校法人国際総合学園 FSGカレッジリーグに属する一般社団法人福島新エネルギー総合研究所の研究員を講師として迎え、全3回からなるドローンスクールを川俣高等学校において開催。生徒11名、教員2名、地元企業の担当者12名が受講。高校生の若い感性と社会人のビジネス経験がコラボできるよう参加者を広く受け入れることにしました。

1日(数時間)だけの単発的なドローン講座の形態が多く開催されていますが、今回の取組では、全3回からなる体系的な内容を組みました。具体的には、1回目の講座では、ドローンの構造や関係法令等の基礎知識を学び、操縦を体験しました。2回目はフライトシミュレーターを使用し、より実践的なスキルとして、ドローン内蔵カメラによる対象物を捉える感覚を養いました。また、公開文化祭において創立110周年を記念した人文字「川高110」の空撮を行いました。3回目はプログラミング飛行の基礎を学び、タブレット端末を使用した自動飛行を学習。受講生は初めてのドローンの操縦やプログラミングを楽しみながら、新たな知識やスキルの習得に意欲的に取り組むことができました。

■実施者の声

「スクールを実施することで、新産業創出と人材育成の観点で自治体や地元企業の継続的な連携を生むことができました。また川俣高等学校と共同することで、地域理解や社会的な認知も図ることができました。普段は接点の少ない、自治体、企業、高校生がドローンの可能性について考えることで新たなつながりを生むことができたと思います」

■参加者の声

「実技の時間が確保されており、イラスト入りのテキストも親切で、理解しやすかった」

「福島イノベーション・コースト構想の人材育成カリキュラムにも盛り込むなど、発展させていきたい」

取組団体

「やまおとこ」の会

代表者 高橋 公助さん

取組名称

「やまおとこ」（ナツハゼ）を地域特産品にするための継承事業

取組の概要

震災による避難などで手入れが行き届かなくなってしまったナツハゼ畑を復活。都路小学校児童や地域住民が時間をかけて畑を手入れし、実を採ってジャムを作りました。自分たちの手で畑を再生することで、地域への愛着が醸成されることを目指しました。更に特産品を目指すナツハゼジャム作りによる地域経済の活性と、コミュニティの発展につなげる取組となりました。

■取組の様子

都路町都路くっちゃべろう会、田村市復興応援隊、協力大学生の力を借りて休耕田の利活用、地域資源活用の一環としてナツハゼ畑を復活させました。地元の子どもたちや地域住民とともに春にナツハゼの植樹を行い、山の害虫を食してもらう目的で巣箱も設置。草刈り、取り木、選定、肥料散布などの手入れをおこない、秋には子どもたちと大学生の合同チームでナツハゼの実を摘み取りジャム作りを体験しました。ジャム作りは、田村市都路町「グリーンパーク都路」で実施、地域の方にナツハゼの実を選別する作業、ジャムを作る作業など工程ごとに教えていただきました。できたてのジャムをヨーグルトに混ぜたり、パンにつけて食べるなど試食会も実施。今回協力してくれた、桜美林大学、千葉大学、福島大学の学生と子どもたちで班を作り、試食までの全ての工程を班ごとに行い、世代を越えた交流に、終始笑顔の絶えない楽しい雰囲気の会となりました。

子どもたちは、自分たちが暮らす都路町の山自然を仲間たちと共に復活させるというという、貴重な経験ができたと思います。参加者それぞれが都路町の人々とのつながり、地域への愛着を深める機会となりました。

■実施者の声

「自分で摘み取ったナツハゼの実でジャムを作り、一緒に食べた経験は、自然に触れて、見て、地域に愛着を持つ良い機会となったと思います。今後も、地域の子どもたちに向けてこのような機会を積極的に設け、地元の山々の自然を、子供たちや地域住民にもっと知ってもらいたいと思っています」

■参加者の声

「ナツハゼの実がグリーンパークにあることを初めて知りました。ナツハゼ摘みは少し大変でしたが、大学生の方とみんなで一緒にジャムを作ることができて楽しかったです。都路町のことを知ることができました」

取組団体

一般社団法人葛尾むらづくり公社

代表者 松本 松男さん

取組名称

かつらおの歴史を知る

取組の概要

葛尾村は避難指示が解除された現在も村民は約1400人中250人弱で、村民同士のつながりはまだ再生できていません。取組では、専門家による解説などを交え、葛尾村の歴史を語り部に伝えてもらいました。村の歴史を知ってもらうこと、つつじやあじさいなど古くから葛尾村とゆかりのある花木の植栽を行うことなどを通じて、つながりを創出、交流人口の拡大を図りました。

■取組の様子

葛尾村には古くからの伝習や構造物があります。これらを後世に伝えていくことが葛尾村のアイデンティティにつながるものだと考えました。しかし、避難によってまだ戻っていない世帯もあり、村の中でも村の歴史について語れる村民も多くはありません。そこで、葛尾村における交流の場として設置された葛尾村復興交流館「あぜりあ」において、つつじやあじさいなど古くから葛尾村とゆかりのある花木の植栽を行いました。他町村にある仮設住宅や復興公営住宅に住む村民にとっても、村の暮らしに思いを馳せる機会となりました。また、あぜりあの蔵に昔ながらの舞台を設置し、人形劇「葛尾大尽」(明治まで莫大な富を持つ松本三九郎一族の物語)や葛尾の竜子山に伝わる「たつ子姫伝説」の朗読会を開催。伝承を伝える語り部の話とともに、専門家による解説も行いました。

さらに語り部「震災を語る」では、震災発生からその後の行動や思いについて公社職員による解説も交えながら、被災者の視点で語り合いました。さまざまな形で物語が伝えられ、ゆったりとした雰囲気の中で葛尾の歴史について理解を深めることができたと思います。

■実施者の声

「村内への帰還がこれからであり、こうした取組を地道に行っていくことが必要だと思います。今回は村外住民がイベントのために村に戻り、村内住民とつながりをもつことができました。また、村外の学生が村に来て、葛尾の歴史を知るきっかけにもなりました。今後は積極的に『語る』ことができる村民を発掘していきたいと思います」

■参加者の声

「この取組で、葛尾の歴史の一端がよくわかりました」

「葛尾の歴史を伝える人たちの思いが伝わりました」

「自分が思っていたストーリーと違っているが、人それぞれなんだなと思いました」

取組団体

大堀地区きずなの会

代表者 齊藤 基さん

取組名称

ふるさと大堀小学校に集い、郷土料理でつながりコミュニティの再生を目指す

取組の概要

避難指示解除区域と避難指示区域が混在する浪江町大堀地区は、帰還が進みにくく、地域のつながりが薄れていく傾向にあります。取組では、地域住民がふるさとの暮らしを未来につないでいくための絆づくりとして、地域の象徴の一つである大堀小学校に集い、学校の環境整備、料理教室、芋煮会を実施。8年ぶりの地域行事によって交流の活性化を図りました。

■取組の様子

当日は、申し込みをしていなかった大堀地域住民や地域外の周辺市町村の方も、口コミでイベントを知って飛び入りで参加するなどとても盛況でした。総参加者は90名を超え、メディアの方も訪れるなど地域全体に賑わいが生まれました。大堀小学校は、震災前は草刈りや清掃などで地域住民が集まる活動の場だったこともあり、参加者が再会に胸を弾ませながら、楽しそうに作業に取り組む姿が印象的でした。

料理教室では年配の料理講師から、芋煮の材料の切り方、煮る順番、味付けを教わりました。餅つきでも、臼を乾かさないなど、昔ながらのつき方のコツを講師から教わり、最後は餅入りの芋煮として、参加者全員で鍋を囲みました。次の世代となる参加者が、ふるさと味を残そうと真剣に学ぶ姿を多く見ることができました。参加された年配の方々は震災前の地域行事の思い出を語り合い、楽しそうに昔話に花を咲かせていました。

約8年ぶりの地域行事に、参加者の表情はとても明るく生き生きとしており、地域住民の交流、再会の場として意味のあるものとなったと思います。これからの活動についても活発に意見が交わされ、大堀地区の活性化につながる場となりました。

■実施者の声

実施後のアンケートには、「毎年やってほしい」「地域を残していきたい」という声が多く挙げられているため、今後も継続的に開催したいと考えています。地域住民にとっては今回の取組が、地域の残し方について考えるひとつのきっかけになったと思います。地域のつながりが再構築され、多くの活動が生まれていくことを期待しています。

■参加者の声

「子供の頃の記憶も蘇ってきて、震災前のことを思い出すことができました」

「久しぶりに会いたい人に会うことができ、懐かしく嬉しく思いました」

「地域住民の絆を感じ、大堀に対する思いが強まりました」